

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：17102
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：20K01076
研究課題名（和文）横穴式石室の三次元計測による6・7世紀の地域支配の実態解明：北部九州を中心に

研究課題名（英文）An archaeological study on local ruling systems in state formation process as seen from 3D measurement of horizontal stone chamber tombs in Northern Kyushu, Japan, during the 6th to 7th centuries AD

研究代表者
辻田 淳一郎 (TSUJITA, Jun'ichiro)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：50372751
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本列島の古代国家形成過程について、地域支配の観点から考古学的に説明することを目的とする。具体的には、北部九州を対象地域としながら、6・7世紀の古墳の埋葬施設である横穴式石室について三次元計測を行い、北部九州各地における地域社会の秩序について検討を行った。その結果、6世紀の北部九州においては、前方後円墳の築造停止のあり方について、大きく3つの類型化が可能であることが明らかとなった。いずれの場合も最上位の古墳では北部九州の在来の横穴式石室が採用されており、6世紀代の地域支配が、ヤマト王権との政治的結びつきとともに、地域社会の在地的な秩序を背景としながら展開したものと想定された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本列島の古代国家形成過程と地域支配の実態を考える上では、考古学・文献史学双方の成果が重要である。本研究では、考古学的な資料として、北部九州における6・7世紀代の古墳と埋葬施設としての横穴式石室および副葬品などを扱いながら、6・7世紀のミヤケ制・部民制といった文献史学の成果との接合を試みた。その結果、北部九州の中でも那津官家などが設置された博多湾沿岸地域と、有力氏族の勢力基盤が安定した地域などでは前方後円墳の築造停止過程が異なることなどを確認した。このことは、ミヤケ制や部民制の地域の実態を示すとともに、古代国家形成過程を実証的に説明する上での考古学的資料・方法の有効性を示すものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, the author discussed about local ruling systems in the process of state formation in northern Kyushu region by analyzing keyhole-shaped tumuli and its mortuary facilities, horizontal stone chamber tombs, during the 6th to 7th centuries. In this analysis, the author used 3D measurement for observing horizontal stone chambers. As a result, the author classified the ways of ceasing of keyhole-shaped tumuli construction for three types in northern Kyushu region and found that the local types of horizontal stone chamber were used for the elites' tumuli in each types. The author concluded that the local societies were ruled and ordered not only by the political connection with the central authority but also by local elites in this period,

研究分野：考古学

キーワード：考古学 古墳時代後期 横穴式石室 三次元計測 北部九州

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本列島の古代国家形成過程における地域支配の実態を考古学的にどのように説明するかという点を課題とする。近年では、文献史学・考古学の分野双方で特に5～7世紀における政治支配体制の問題について活発な議論が行われている。そこにおいては、いわゆる5世紀の「倭の五王」の時代における「府官制的秩序」や「人制」から、継体・欽明朝期における「筑紫君磐井の乱」後のミヤケ設置、国造制・部民制の成立・展開を経て、ヤマト王権による列島各地の間接支配がどのように行われたのかという点が議論の焦点の一つとなっている。この点で、「磐井の乱」後のミヤケ設置をはじめとする様々な政治的変動は、古代国家形成過程における「6世紀中葉の画期」とも考えられてきた。この問題を考える上では、文献史料のみならず、各地の遺跡から出土した考古資料の検討が重要である。筆者は、各種の考古資料の中でも、特に6・7世紀の横穴式石室と副葬品に注目している。特に横穴式石室に関しては、形態的な系譜や規模、構築技術からみた階層性・序列化の検討を通じて、地域社会内部での在地的な社会的・政治的秩序の復元が可能な資料と考えることができる。また本研究が対象とするのは主に北部九州地域であるが、この地域は、上述の「磐井の乱」が起こった後、糟屋屯倉の設置・那津官家の修造が行われたとされる地域であるだけでなく、初期のミヤケに関連する遺跡が発掘調査によって具体的に明らかにされていることから(例：福岡市比恵遺跡など)、ヤマト王権の政治的軍事的拠点として初期のミヤケが設置された地域とその周辺において、地域社会がどのように編成されたのかを考える上でも重要なフィールドであると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、上述のように、地域支配の観点にもとづく日本列島の古代国家形成過程の説明と、そこにおける6・7世紀史の歴史的意義を考古学的に明らかにすることを目的とする。その素材として、本研究では、特に複室・単室構造の違いといった点も含めた横穴式石室の階層性に着目する。特に前者の複室両袖型横穴式石室は、北部九州では各地の最上位層の墓で採用されており、一部の古墳については、ミヤケの管掌者や国造級といった被葬者像が想定されてきた。本研究では、この複室・単室両袖型横穴式石室の出現・展開過程と各地域での様相の検討を通じて、この時期の地域社会の階層性と地域社会相互の関係を考古学的に分析する。また本研究では主に北部九州地域を対象とするが、将来的には本研究の成果をふまえて6・7世紀における列島各地の様相について、同様のアプローチによる比較検討が可能と考えており、本研究でそのための基礎的なデータを構築することを課題とする。

3. 研究の方法

本研究では、大きく以下の2点を具体的な検討課題とする。

- A) 北部九州地域を中心とした6・7世紀の横穴式石室の三次元計測と、横穴式石室の系譜・階層性の検討、副葬品の組み合わせと石室の階層性からみた在地の社会関係の考古学的モデル化
- B) 上記A)をもとに、古代国家形成過程における6・7世紀史の意義を説明する

A)は、本研究の核となる分析であり、北部九州地域(主に福岡・佐賀・長崎各県)を中心として、保存状態が良好な6・7世紀代の複室・単室横穴式石室の資料について三次元計測を行い、形態の系譜関係や構築技術からみた各地の地域的な特徴を検討する。三次元計測を実施するメリットとして、特に二次元データでは表現されにくい天井部付近の石材架構方法や様々な角度での比較検討が可能となる点が挙げられる。6世紀代は各地の石室系譜の影響が錯綜して複雑な様相を呈していることから、三次元計測のデータを用いた石材構築技術の系譜および使用石材に関する分析・整理を行い、地域同士の関係と階層性を検討する。またあわせてそうした各地の古墳から出土した副葬品について、それらの共伴関係にもとづく階層的位置づけという観点から分析を行う。

B)は、A)の考古学的成果をふまえ、文献史学の成果との接続の可能性に関する検討を行った上で、6・7世紀の北部九州における地域支配の実態を論ずるものである。ここでは、特に上述の「6世紀中葉の画期」が横穴式石室の変遷においてどのような意義を持つのか、これらの考古学的現象が6・7世紀史のどの部分をどのように反映しているのか、また古代国家形成過程においてどのような意義を持つのかについて具体的に議論する。

4. 研究成果

本課題研究期間の成果について、大きく上述(A)横穴式石室の三次元計測と(B)それにも

とづく6・7世紀史の検討という二点に分けて説明する。

(1) 横穴式石室の具体的な三次元計測の成果

本課題研究期間においては、北部九州各地の横穴式石室について、報告書を中心とした資料収集と研究史の整理を行った。特に6世紀中葉以降における複室両袖型横穴式石室の各地での展開とそれぞれの系譜に関する検討を行った。その上で、福岡県内の福岡市・春日市・大野城市・筑紫野市・福津市・宮若市・鞍手町・飯塚市・桂川町・小郡市・筑前町・朝倉市・うきは市・八女市・立花町・田川市・苅田町・行橋市・みやこ町・上毛町、佐賀県内の神埼市・吉野ヶ里町・武雄市・鹿島市・小城市、長崎県の壱岐市などの各地に所在する6・7世紀代の横穴式石室を対象として、フォトグラメトリおよびLiDARを併用して三次元計測を行った。全体として、平面・立面プランおよび石室構築技術のより詳細な観察が可能となり、それにもとづく系譜関係・年代観の検討の基礎データを得ることができた。あわせて、各古墳から出土した副葬品とその組合せについての検討を行った。これらの三次元計測にもとづく横穴式石室の分析結果の詳細については、今後公表する予定である。

(2) (1)にもとづく6・7世紀史の検討

上述の三次元計測と並行して、それらの成果もふまえて、北部九州の中でも主に福岡県域を対象として、前方後円墳の築造停止とその背景に関する検討を行った。西日本における前方後円墳の築造停止時期に関しては、6世紀後半のTK43型式前後であることが知られるが、北部九州においては、博多湾沿岸地域のように、それより若干早く6世紀中葉のTK10型式期に前方後円墳の築造が終了し、かつ大型の前方後円墳が築かれない地域と、TK43型式の段階に前方後円墳の規模が大型化した後、大型円墳などに転換する地域の両者が存在する。筆者はこの両者と横穴式石室の階層性に注目しつつ検討を行った結果、北部九州の前方後円墳の築造停止について、大きく以下の3つの類型化を行った(辻田2023)。

A 類型：全長70m以上の大型前方後円墳の築造停止が早く、小規模化する地域。以下の2つに細分する。

A1 類型：大型前方後円墳の築造停止が早く(TK10型式前後)、群集墳の中で小型前方後円墳が築造される(福岡平野、早良平野、糸島半島東部、糸島平野・今宿平野など)

A2 類型：大型前方後円墳が不在で、60m級の前方後円墳を上位として周辺に群集墳・横穴墓が営まれる(遠賀川上流域など)

B 類型：前方後円墳の規模が90m~100m級に大型化した後、大型円墳に転換する(宗像地域、筑後川中流域南岸、八女地域など)

C 類型：前時期までに在地の大型前方後円墳などが不在ながら、6世紀後半(TK43型式)に大型円墳などが出現する(筑紫野・小郡地域、遠賀川中流域など)

これらはそれぞれ横穴式石室との階層性と結びついており、いずれの類型においても基本的に最上位の古墳では複室両袖型横穴式石室が採用される一方、下位の階層においては単室両袖型横穴式石室が採用される。また糸島地域以西では単室両袖型横穴式石室が主体で複室両袖型石室が殆ど採用されないといったあり方が認められる。上記3つの類型のうちA類型とC類型は博多湾沿岸地域などのミヤケが設置された地域との結びつきが強く、B類型においては在地の有力氏族の勢力基盤が比較的安定した地域に認められることを確認した。また各地の上位層の古墳に採用された横穴式石室が基本的には北部九州の在来の横穴式石室であることから、「磐井の乱」後におけるミヤケの設置やその前後における6世紀代の地域支配が、ヤマト王権との政治的結びつきとともに、地域社会の在地的な秩序を背景としながら展開したものと想定された。

(3) 課題と展望

以上の成果をふまえた課題として、以下のような点が挙げられる。第一は、横穴式石室の三次元計測についての対象地域の拡大という点である。本課題研究期間では、主に福岡県・佐賀県の資料を対象として三次元計測を行ったが、熊本県域や大分県域の資料については殆ど検討を行うことができなかった。これについては今後継続して調査を行い、北部九州との関係についても検討を行いたいと考えている。第二に、7世紀代の資料の少なさという点が挙げられる。本課題研究期間で三次元計測を行うことができたのは6世紀代の横穴式石室が主体であり、7世紀代の石室については詳細な検討を行うことができていない。7世紀代は石室の数自体が大幅に減少するが、この点も含め今後検討を進めたい。本課題研究期間において収集・分析したデータとそれにもとづく成果については、その後の検討結果もふまえて、今後順次公表していく予定である。

<引用文献>

・辻田淳一郎, 前方後円墳の築造停止とその背景—北部九州を中心に—, 史淵, 第160輯, 2023, pp.55-92

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 160
2. 論文標題 前方後円墳の築造停止とその背景 北部九州を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 55-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 18
2. 論文標題 博多湾沿岸地域の古墳時代後期社会 那津官家の時代	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 市史研究ふくおか	6. 最初と最後の頁 42-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 副葬品からみた伊都国王の実像	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第6回伊都国フォーラム「伊都国王がみた世界 弥生時代の王権・外交・生産」, 糸島市役所文化課	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 古墳時代の威信財授受と親族関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学協会2022年度福岡大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 季刊考古学別冊35
2. 論文標題 古代国家形成期におけるモニュメント造営と威信財 日本列島の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北條芳隆・小茄子川歩・有松唯編 『社会進化の比較考古学 都市・権力・国家 』, 雄山閣	6. 最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 一貴山銚子塚古墳の埋葬施設・副葬品とその意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第5回伊都国フォーラム「玄界灘を見据えた巨大古墳 ―一貴山銚子塚古墳と釜塚古墳―」, 糸島市役所文化課	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全6巻中の1巻
2. 論文標題 鏡の副葬	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編 『シリーズ地域の古代日本 筑紫と南島』	6. 最初と最後の頁 85-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 全1巻
2. 論文標題 綿貫観音山古墳出土鏡をめぐる諸問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 綿貫観音山古墳のすべて	6. 最初と最後の頁 180-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 下巻
2. 論文標題 ブリテン諸島の鉄器時代後期における鏡の流通と地域間交流	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 持続する志 岩永省三先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 691-716
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻田淳一郎	4. 巻 158
2. 論文標題 古墳時代開始前後における西北九州地域の鏡とその変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史淵	6. 最初と最後の頁 49-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 古墳時代の威信財授受と親族関係
3. 学会等名 日本考古学協会2022年度福岡大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 副葬品からみた伊都国王の実像
3. 学会等名 第6回伊都国フォーラム「伊都国王がみた世界 弥生時代の王権・外交・生産」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 Center and periphery in the process of ancient state formation in the Japanese archipelago: From the viewpoint of Northern Kyushu region
3. 学会等名 日本考古学協会総会（英文機関誌編集委員会による国際セッション「国家形成過程の国際比較研究」，英語による発表）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 鏡からみた弥生時代の交流 原の辻遺跡出土鏡から考える
3. 学会等名 東アジア国際シンポジウム「光り輝く青銅器を求めて 原の辻遺跡出土青銅器から見た東アジア交流」，長崎県埋蔵文化財センター（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 壱岐における大型古墳群造営と古代東アジア
3. 学会等名 九州史学会シンポジウム「国際的視座からみた壱岐国一島史」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 鏡の図像と古代中国の天文景観
3. 学会等名 第4回考古天文学会議（基盤研究A・研究代表者：北條芳隆）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 — 貴山銚子塚古墳の埋葬施設・副葬品とその意義
3. 学会等名 第5回伊都国フォーラム「玄界灘を見据えた巨大古墳 — 貴山銚子塚古墳と釜塚古墳 —」, 糸島市役所文化課 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 博多湾沿岸地域の古墳時代後期社会 那津官家の時代
3. 学会等名 第16回福岡市史講演会「考古学からみた福岡の歴史」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻田淳一郎
2. 発表標題 古代国家形成期におけるモニュメント造営と威信財 日本列島の事例から
3. 学会等名 シンポジウム 社会進化の比較考古学
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------